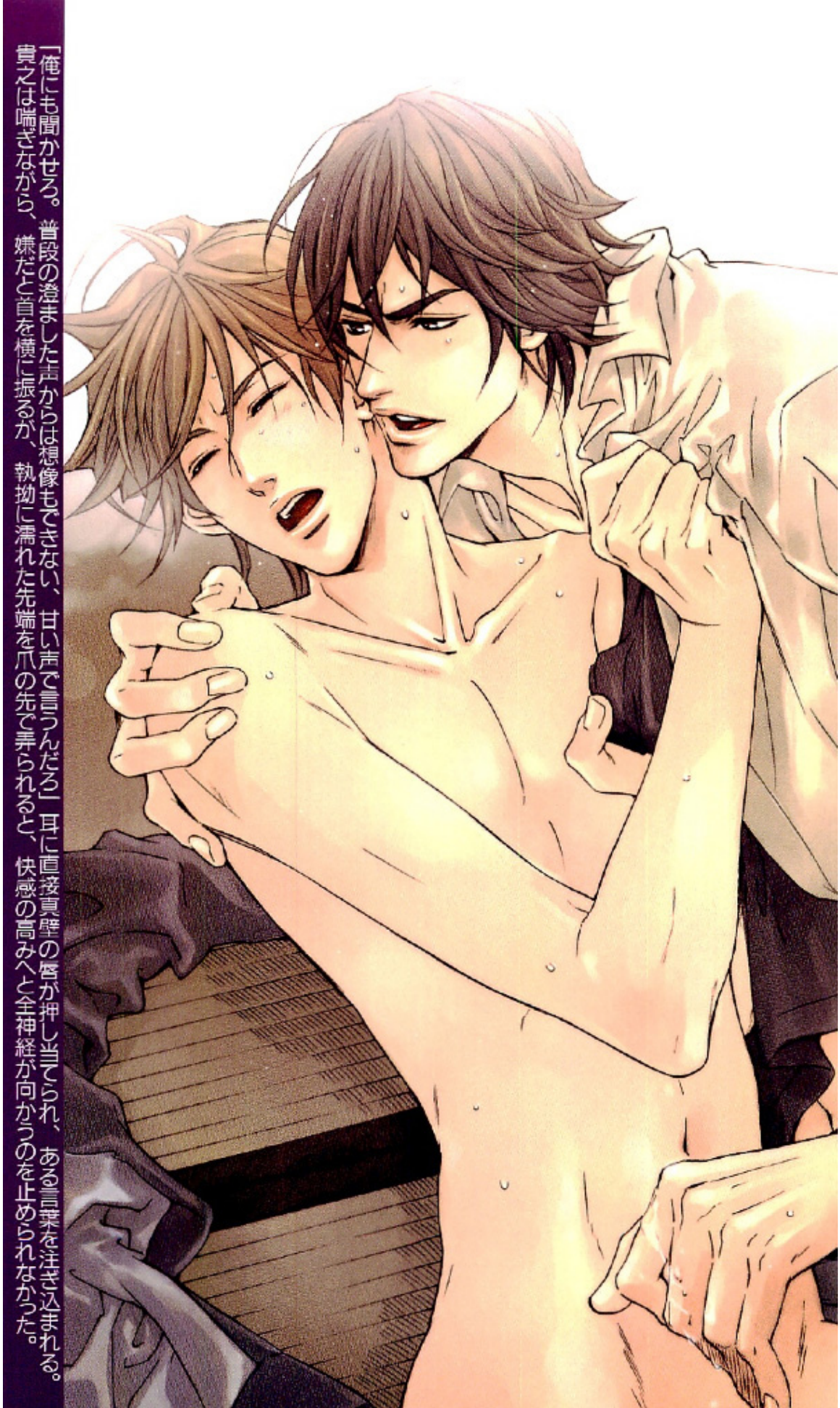
意地っ張りたちの都合
かのえなぎさ
NAGISA KANOE ● PRESENTS
小山田あみ
AMI OYAMADA ● ILLUSTRATION



「俺にも聞かせろ。普段の澄ました声からは想像もできない、甘い声で言うんだろ」耳に直接貫壁の唇が押し当てられ、ある言葉を注ぎ込まれる。貴之は喘ぎながら、嫌だと首を横に振るが、執拗に濡れた先端を爪の先で弄られると、快感の高みへと全神経が向かうのを止められなかった。

意地っ張りたちの都合

《立読み版》

かのえ　なぎさ

イラスト　小山田　あみ

その店は、左右を古い雑居ビルに挟まれて、実に窮屈そうに建っていた。建物そのものが縦に細長いため、なおさらそう見えるのだろう。

窓の配置から推測すると、おそらく二階建てなのだろうが、だとすればずいぶん天井が高い造りになっているのかもしれない。

もう二度と来ないかもしれない店の外観について、九条貴之（くじょうたかゆき）は簡単に観察する。

時間の無駄は嫌いだが、あまり乗り気でない用事を済ませるためここまでやってきたので、気を紛らわせるために余計なことを考えてみたのだ。

「……昔から、嫌いなんだ……」

人に読み古された本が集まった場所は――。

貴之は半ば敵意を込めて、店を見据える。あまり磨いていないのか、路地に面した汚れた窓ガラスの上のほうに、『真壁（まかべ）古書店』と白いペンキで書かれていた。

春らしく暖かな風が吹いて、きちんと整えていた髪を乱す。神経質に指先で杭（す）いた貴之は大きく息を吐いて、引き戸を開けた。

店に足を一歩踏み入れた途端、貴之は細い眉をそっとひそめる。

予想通りというか予想以上というか、埃っぽい空気と、かび臭さが鼻腔を刺激する。しかもただのかび臭さではなく、建物全体に染み込んで、別の何かを醸(かも)しているかのような独特の匂いだ。

どれだけの人間に触れられたかわからない古本が集まっているのだ。得体の知れないものが漂っていても不思議ではない。半ば本気で貴之はそう考える。

子供の頃から潔癖症のきらいはあったが、三十一歳の今現在、それはピークに達しているのではないかと感じている。とにかく、他人が触れたものは、たとえペンであっても触れるのは嫌なのだ。

それが、何度読まれ、どんな扱いを受けたかもわからない古本となると、なおさらだ。大学の、一見整然としてきれいな図書室に収められている本ですら触りたくない。

そんな自分が、どうしてこんな場所にこなければならないのか。

貴之はハンカチで鼻と口元を軽く覆いながら、じろじろと店内を見回す。当たり前だが、目につくものといえば本ばかりだった。

店に入ってすぐのところに階段があり、一応二階までの吹き抜けとなっている。それでいて閉塞感しか覚えないのは、ただでさえ狭い階段の両端に崩れない程度に本が積み重ねられているからだ。

一段だけではなく、この様子なら二階に続くすべての段が同じ状態だろう。おかげで人が一人通るのがやっとという具合だ。

他に目を向ければ、壁一面に見上げるほど背の高い本棚が並び、その本棚の上には本が溢れ出しかけた段ボールが置かれている。地震が起きたらと考えて、貴之はあえて怖い想像は頭から追い払っていた。

もちろん壁側にだけ本棚が置かれているわけではなく、縦だけでなく奥へと細長い店内に、限界まで押し込めたという感じで本棚が向き合い通路を作っている。

古本のジャングルだ、と貴之は心の中で洩らしていた。

ふと視線を横に向けると、レジはあるが人がいない。

「なんでいないんだ。客はいるくせに……」

「――邪魔」

突然背後から不機嫌そうな声をかけられ、ハッとして貴之は振り返る。いつからそこにいたのか、開いた引き戸にもたれかかるようにして男が立っていた。あからさまに、貴之のせいで通りたくても通れない、というポーズだ。

反射的に引き戸の前から退くと、億劫(おっくう)そうに男が傍らを通り過ぎる。貴之は向けられた男の後ろ姿を目で追う。

自分でも持て余しているといいたげな長身で、それに見合って腰の位置が高い。Tシャツの上からでもわかる体は筋肉質で引き締まっており、驚くほどのスタイルのよさは外国人モデルのようだ。

貴之の中で、わずかにコンプレックスが疼く。身長は平均を上回っているが、逞しさからは程遠い体つきなのだ。もっとも、最近の学生の発育のよさを嫌というほど目の当たりにしていると、自然と諦観(ていかん)という感情は身につく。

なのにこの男は、見事に貴之を嫌な気分にしてくれるのだ。

貴之がさらに眉をひそめている間に、気づいた様子もなく男はレジのカウンターの上に持っていた荷物を置いた。中身はわからないが、とにかく風呂敷に包まれている。

「なんかの営業か？」

前置きもなくそう言って男が振り返る。

怯(ひる)むほど眼差しが物騒で鋭い。それが、男の顔を真正面から見ての貴之の第一印象だった。

「はあ？」

問いが自分に向けられたものだと知り、貴之はムッとする。自分で切っているのではないかと思うほど、適当に伸びて不揃いな髪を乱暴な手つきで掻き上げて、男は胡乱（うろん）げに貴之を観察してきた。

値踏みといったほうが正確かもしれない。貴之も敵意を込めて男を眺める。

体つき同様、顔立ちも日本人離れしていた。丹念に彫り上げた彫刻のように目鼻立ちがはっきりとして、バランスよく配置されている。その中でもやはり目が印象的だった。

極上の美貌という表現は違和感を覚えるが、世間の大半の人間は、いい男だという評価を下すだろう。だが、こんな一言も付け加えるかもしれない。

多少怖そうだが、と。

古本に囲まれた中で見ると、とにかくインパクトは十分だ。人の顔を覚えるのが苦手な貴之ですら、数日間は覚えていられる自信がある。

男は男で、まだ貴之をじろじろと眺めている。

貴之は職業柄、自分がどう見られているか常に気にかけていた。男としては細身の体を、仕立てのい

いスーツで包み、靴も磨いてある。癖のない髪をきちんとセットしてあるのは当然のことで、ジャケットのポケットにはハンカチも入っている。清潔感は、何よりも優先すべきことだった。

ここまで気をつかっていて怪しい人物だと思われたら、たまったものではなかった。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

意地っ張りたちの都合

《立読み版》

発行日　２０１１年１２月３０日
著者名　かのえ　なぎさ
イラスト　小山田　あみ
発行所　【ＭＩＬＫ－ＣＲＯＷＮ（ミルククラウン）】
株式会社水晶院
http://www.milk-crown.net/

(C) Nagisa Kanoe 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。